

武蔵野日曜聖書講筈

天国は如此

——マタイ伝第13章44～46節——

1987年2月1日

小池辰雄

福音Ⅱ天国 無比なるもの 天賦天職 ただ一つのことを 私だけを キリストが宝 天童
無者となれ

【マタイ13】

44 天国は畑に隠れたる宝のごとし。人、見出さば之を隠しおきて、喜びゆき、
有^もてる物をことごとく売りて其の畑を買うなり。

45 また天国は良き真珠を求むる商人のごとし。46 価たかき真珠、一つを見出さば、
往きて有^もてる物をことごとく売りて、之を買うなり。

●福音Ⅱ天国

マタイ伝は「天国」という言葉が非常に多い。例えば、4章23節に、

「イエス^{あまね}遍くガリラヤを巡り、会堂^{おしえ}にて教をなし、御国^{みくに}の福音を宣^のべつたえ、
民の中のもろもろの病、もろもろの疾患^{わざうらい}をいやし給う」(マタイ4・23)

「御国の福音」と書いてあるでしょ。この「御国」は「天国」という字です。天国は要するに、
キリストにとっては福音なんです。福音の内容は天国なんです。だから、

「福音Ⅱ天国」

と言ってもいい。ですから、今のマタイ伝4章23節は、ギリシヤ語でいつてもそういう字
になっています。

「ト ユーアンゲリオン テース バシレイアス」

「バシレイア」という字が「天国」で、「ユーアンゲリオン」は「福音」です。だから、

「天国の福音、御国という福音」

という気持でいいわけです。この言葉が一番表している。この「バシレイア」という字は、「バ
シレオー」という動詞からきている。「バシレオス」という名詞とも関係するんですが、要
するに、「王たること」、或いは「王として支配すること。そういう動詞や名詞であるわけ
です。ヘブライ語でいうと、「マーラック」「メレク」という字です。昔は王国ですから。共
和制ではない。それで「王」という字が出てくる。「王の王」といえば、キリストになる。
王が続べ治める、支配する。



民主主義でも、大統領がやはりそういう役割をするわけです。民主主義でも、たくさん
の意見があつて、いろいろ議^{はか}り合いますけれども、最後に決定する者はやはり、その代表
者がやるわけですから。大学でも学長が、中学校高等学校では校長が——みんなそうです
——長たる人が決定する。会社でもそう。

ところが、今の民主主義では、多数決でもって、それがもう決定権みたいになつてしまつ
て、まるで上にある人がロケットみたいになつている。公立の校長なんていうのは、だい
ぶそういう傾向にあるようだな。

私はD学校にいたときに、一応、教諭会議で多数決でやっていますけれども、でも私
の意見に明らかに反する時は、私はひっくり返してしまつた。決して多数決でいかない。

「それだけの権限が校長にないなら、私は今日でも辞めるから」
とはつきり言つた。それだから、みんな静まつてしまつた。

ところが、大学あたりでは、学長が実にそういう権威がない。それでは本当の民主主義
ではない。衆愚主義になつてしまふ。いわゆる多数主義になつてしまふ。それだったら、
上に立つ人なんか要らないわけです。

要するに、王として——言葉の一番内容の深い正当な意味において——民主主義の国で
あろうと、やはり、大統領とか首相とかいう代表者がいるわけですから、それが「バシレ
イア」です。そういう構造になつている。どこだつて、それはピラミッド式なんです。ただ、
非常に専制君主的な王さまがいるね、これはまた困つたものだ。いわゆる封建時代の、上
に立つのが勝手なことをして、下の人が何も言えない、泣き寝入りであるという、涙と血
を流すというような、とんでもない場合が大いにあるわけです。

福音の世界はもちろん、本当の王者は神さまです。神の支配するところ、それは義と愛
をもつてなされる。そういう国、それが「バシレイア」である。内容は全く福音的な内容です。
それは「天国」という。「天国」という言葉はいい言葉だね。マタイ伝の最初のキリストの
言葉がそうでしょ。

「恵^{さいわい}福なるかな、霊の貧しき者、天国はその人のものなり」
という。そういうわけです。

●無比なるもの

マタイ伝13章44節、

44 天国は畑に隠れたる宝のことし。

この譬^{たと}えは面白い譬^{たと}えです。

人、見出さば之を隠しおきて、喜びゆき、有^もてる物をことごとく売^りて其の
畑を買^うなり。

キリストというひとは随分おもしろい譬話をおっしゃる。ヘタすると、取り違^いをする。



見出ししたら、隠しておいて——これはみんなに分かつてはいかんと——喜んで行って、それで有てる物をことごとく売って、しかもその宝を買うのではなくて、畑を買ってしまう。そうすると、その中に天国的な宝がある、というわけだ。

⁴⁵また天国は良き真珠を求むる商人のごとし。⁴⁶ 価たかき真珠一つを見出さば、その頃の真珠というのは大変なものなんだな。今でいうとダイヤモンドでしょうけれども。

往きて有てる物をことごとく売って、之を買うなり。

今日のお話はこの二つです。要するに、宝だとか真珠だとか。この宝はどんな宝だか分かりませんが——別に「宝石」という字ではないが、内容は分からん——とにかく宝です。ということとは、これは他のものと比較にならないものだ。だから、

「他のものはみんな売ってもこれだけは」

という、そういう比較を絶するものです。無比なるものです。要するに、キリストが仰りたいのは、

「これは無比なるものだ。絶対的なものだ」

ということ。

「天国は無比なるものだ。これを取りそこなつたならば、生命を失うくらいな、生命とも代えられないような、そういうものが天国だ。それが福音だ」

と言うんです。「天国」(バシレイア)という「福音」(ユーアンゲリオン)だ。我々には、この捕まえられているところの、捕まえさせられているこの福音というものは、他のものとは比較にならないものだということです。そうすると、大変うれしいわけです。他のものを喜んでも相対的な喜びだけれども、天国というものは絶対的な喜びの世界だ。だから、喜びの音信、^{よろこび}歡喜です。どんな悲しみも、どんな苦しきも、この歡喜を消すわけにはいかないという、そういう歡喜です。だから、本当に天国を捕まえている殉教者たちは、焼かれながら讚美歌を歌っているようなわけだ。そういう人たちがいますね。それが天国という。

●天賦天職

まだ、もう少し相対界で私は言います。一人びとりは^{てんぶ}天賦をいただいている。天から賜ったところの才能、資質をいただいている。そういう天賦に天職がある。この「天」という字は非常に大事なんだ。私は自分の号に「天」という字を付けるのも、そういう気持があるわけです。私はもう天国人だ。地上を歩いていても、これをただ地上と思っていない。相対界と思っていないから。相対界において絶対界を生きている。だから、何と思われようと一向差し支えないというわけです。

「天」という字は、あなた方は知っていますか。人の頭の上に光輪がさしている。これが天という字だ。素晴らしい字なんだ。とにかく、漢字は、文句なしに世界最高の文字です。漢字にかなう字はありません。その漢字をいい加減なことをしているから困ったもんだ。



中国それ自身が大事な漢字という宝をそこねている。略してしまっている。しょうがないね、この略は。編だけを書いてみたり、造りだけを書いてみたり、それをまた略してみたり。逆にこれは何という字だろうかと、分からない。返つてややこしいことになっている。「めぐみ」もちゃんと「恵」と書かなくてははいかん。まあ、「憂鬱」の「鬱」なんていう字は、あんなのを書いていたら、今度は憂鬱になるけれども（笑）。大変な字だな、あれは。書けるか？「龜」という字だつて、もともとやつかいな字（龜）なんだけれども、あれは略したりする。まあ、ああいう略し方は仕方がないよね。

天賦てんぷ天職てんせきということ。私はD中学・高等学校の教育方針に、

「敬天愛人」

「天賦天職」

を掲げた。そういうところに使命があるのだから、その使命をもった勉強の仕方をしないといかん。使命をちゃんと狙った、抱負をもった勉強の仕方をしないで、どうするかと。

入学試験というバカげたことがあつて、それを通るためにはやむを得ざる試験勉強だとかをやつて、非常にゆがめられているわけです。本当に勉強して、それを伸ばしていくために、ちょうどいいような専門学校がたくさんあればいい。

「何人いなければ学校ではない」

なんていうことをやっているから文部省もけしからんと思う。今度の第九卷（『感想と紀行』1987年5月刊）にいろいろ書いたから。

そういう天賦天職ということ。とにかく、本当の生き甲斐というものはやはり、そういった精神をしっかりと、やっつけていかなければダメです。日本では教育の問題が一番大事な問題なんだが、その掌に当たる人で本当に福音を把つかんでいる人が少ない。

神さまから賜った自分の使命的な素質、天賦というもの、ここに天国がある。それに打ち込むときには楽しい。打ち込みがあるし、楽しい。どんなにそれが未完成であろうと、それは構わない。地上ではとにかく本当の完成なんていうことはありえない。地上は、未完成でありながら完成的な質をもつことが大事なんです。三日月であろうと、半月であろうといいから、必ず満月的な質をもっていなければダメです。欠けていくようなのではダメだよ。満月を約束している月は上弦の月でなければ。下弦の月でははいかん。

今、月はどうなっているか知っているかな、みんな。私は朝五時頃ちよつと目がさめるからね。今は、明けの明星が素晴らしい。今朝は曇つていてダメだったけれども。素晴らしいよ、明けの明星は。私はもう靈感がくるね、あの明星を見ていると。

皆さんの中に神さまから賜っている使命的な素質がある。人にはどう見えようと、そんなことはどうでもいい。それは、そこに天国がありますから。ところが、現実には、その使命的な素質において天職的な仕事が出来ないんだ。

「やむを得ずして、こつこつ仕事をやっています」



という場合が非常に多いわけだ。まあ、仕方がない。生活の問題があるから。けれども、自分の天職は本当はここにあると。そうしたら、これはとにかく時間のゆるすかぎりコツコツやりなさい。そこに生活の本当の隠れた力がありますから。そうすると、やむを得ずやっている仕事の中に、何かしらんけれども、その本質的なものがそこで作用を始める。だから、やむを得ざる仕事もまた本当にできるようになる。要するに、天国をもっていないと、天国的な生き方ができなくなってしまうんです。今は、いろんなこの世的なマインスの状況がたくさんあるからね。そうすると、それに押しつぶされてしまって、つまらないことになる。そういう意味で

「自分の本質を裏切るな、本質には忠実であれ」

ということですよ。私はドイツ文学を選んで良かったと思っています。哲学よりもやはり私は文学だった。とにかく、自分のいただいた大事なものは、本当にそいつに打ち込んでいかないとダメです。どうぞ、皆さん、

「我々の中にそういう天国が実は素質的に賜っている」

ということを自覚してください。

●ただ一つのことを

それから今度は、

「これを見つけたら、他のものはみんな売ってしまったも」

という。ベートーヴェンがそうだった。

「ただ一つのこと（音楽）を」

と。彼は聾になっちゃった。音楽家が聾になっちゃたら、これはもう致命的だ。ミルトンもそうだよ、失明してしまった。ミルトンも詩を書くことと書けないんだ。だから、娘さんたちに書いてもらった。ところが、ベートーヴェンは肉の耳でなくて霊の耳で聞いている。それで作曲ができる。へたな演奏よりも、楽譜を見ている方が音が素晴らしいという、そういう世界だ。ケーベルさんがそうだったというね。へたな演奏を聞くよりも、楽譜を見ている方がいいという。

時々私は引用するでしょ、徒然草の一八八段のところを。

「これと違うことに打ち込んで、他のことはどうでもいいぞ」

と。兼好法師もそういうことを言っている。とにかく、中心のない生き方はダメなんです、ソフトフォーカスは。焦点を結んだ生き方をしないと。今の受験は焦点を結ばせないからね。

「私は学校はやめた。私は自分の仕事を自分で打ち込んでやる。そのうちに見てる」という青年がいたっていいんだよ。学校なんか入らなくなっちゃって。吉川英治なんかそうだな。あれだけの大文豪になっちゃった。

とにかく、焦点を結んだ、焦点のある人間でないとね。本当の張りはそこにある。この



焦点に聖霊が臨んでくるわけです。そうすると、本当に焼ける。これはどんな嵐も消すわけにいかん。そして、それが光つてきますから。周りに影響を及ぼしてくる。そういう焦点をもった深みのある人にならなくては。

私は行動、行いのことをよく言うでしょ。本当の動は内側に本当の静をもっていなければダメです。そういう静動、如くでなければダメです。ただ動いてばかりいるのはいいのではない。動は深い静をもたなければ本当の動でなくなってしまう。上つ面の動になってしまう。深みのない福音は、「ワツシヨイ、ワツシヨイ」なんていうのはダメなんです。

キリストという方は正にこの深みの素晴らしいひとだった。福音書を読むと分かる。深い祈りをしている。それが発すると、湖の上を涉つたりする。一晩中、祈っていたんだ。あのキリストは。それで湖の上を涉ってきた。この霊的な深みの世界です。

●私だけを

福音というのはそういう宝——「宝」とか「真珠」とか、キリストはここで譬えられましたけれども——これは無比なものだから、他のものとは代えられない。そして、この福音は、棄てたと思つたものを今度は逆に活かす。愛の世界もそうなんだ。

「我よりも何々を愛する者は我にふさわしからず」という。

「私だけを愛しなさい。私はお前を100%に愛しているぞ」

と、キリストは一人びとりに仰つている。あなた方一人びとりに、

「100%に愛するぞ」

と。愛し方はそれぞれですよ。神・キリストの愛し方はいろいろですから、

「あの人にはあのように、私にはこのように」

と、それぞれの愛し方は千変万化です。ただし、どれも100%というのが神さまの愛なんです。

「心を尽くし、思いを尽くし、力を尽くして、主なる汝の神を愛すべし」

と申命記に書いてある。だから、

「私よりも何々を愛する者は、私にふさわしからず」という。

という。

「私を愛することは絶対的な愛だ、絶対的な質を持って。そうすると、今まで棄てたと思つたものが今度は本当に愛せるぞ」ということになる。

「敵をも愛せよ」

とキリストは言われた。愛せる。

ということとは、キリストの愛を本当に受けとれば、キリストを愛さざるを得ない。もちろんそうですよ、こつちから先に愛するのではない。キリストの愛に圧倒されるから、そ



れができる。

私はこのことは、無教会のときには分からなかった。

「神を愛せよ、キリストを愛せよ」

と言われても、どうにもならんと思つて悲観してしまった。これは聖霊が来なければダメなんだ。キリストの愛に圧倒される。その十字架・聖霊に圧倒されるから愛さざるを得ない。「『愛せよ』なんておっしゃらなくなつて、愛さないでは私は死んでしまいますよ」

というわけだ。何か精神統一して愛するのではない。楽しい。だから、祈ればすぐその世界に入つてしまう。もう簡単なんだ。私はあんまり簡単でしようがない。皆さんは、一生懸命で祈らなければ、キリストの中に入れないですか。十字架の愛に圧倒されたら、もう「ざるを得ない」ではないですか。何も考えることはないんだ、努力することもない。吸い込まれてしまう。もうたちまちその世界に入つてしまう。そうすると、もう力が来てしまう。

「よし、これから仕事をしてやろう」

と、その祈りのあとから仕事ができるよ。

●キリストが宝

それが天国なんです。だから、こういう天国は、キリストが宝ですよ。いいですか、間違えては困る。キリストは、

「我は汝の宝なり。他のものと代えられるか。我は汝の真珠なり。これを他のものと代えられることができるか。我は汝のダイヤモンドなり」

と、こういうわけです。女の方は、ダイヤモンドは高いから、買わなくなつていいよ。キリストというダイヤモンドを持つていけば、光つてしまう。その人はダイヤモンドみたいだ。どうせ、この世のものはみんな置いていきます。ダイヤモンドを持つて天国へ行けますか。本来無一物ではないですか。無一物に徹すれば、

「在れども無きがごとし、無けれども在るがごとし」

とパウロが言っているとおりだ。自由自在。何もこだわらない。

「聖書だけは持つて行きたいけれども」

なんて言つたつてダメだよ。聖書にならなくては、自分が。

「汝はキリストの書なり」^{ふみ}

という。聖書に化してしまふ。これが天国なんだ。もう地上にいて、

「はい、私は天国人です」

とはつきり言えますから。滑つても転んでも失敗してもいいよ、大丈夫だ。くよくよするな。

「恵福なるかな、霊の貧しき者。天国はその人のものなり」

という。

「いや、もう霊も物も貧しくて結構だ。有れども何も有りません。無者であります」



と。私は自分で自分に

「無者キリスト!」

と言うと、もう力が来るんだよ。「キリストの無者」ということです。

「私はキリストの無者でございます」

と。そうしたらもう、真空ではおかないもの。霊気が、霊灯が、霊光が光るもの。懐中電灯と違うんだ。懐中電灯はだんだん情けない光になっていくけれども、情けない光にならないんだ、キリストの電灯は。

キリストは、「隠しておいて」なんて言うけれども、もう何も隠しておく必要はない。

「いや、キリストという宝を得ました」

と。これは隠さなくなつて、簡単に人は取れない。それはなぜ、取れないかというところ——

「有てる物をことごとく売りに」

ということが大事なんです。「有てる物をことごとく売りに」ということは、

「一切の物を無しとしていく。何ものにもこだわらない。そうすれば、この宝が光つてくる。宝を捕まえられる。宝を捕まえるためには、他のものを持つていては、宝は捕まらない」

というわけです、この譬話は。

「売らなかつたら、取れないぞ。この世の相対的なものを何のかんのかんと言って惜しんでいたらば、この天国はとれないぞ。私を得るためには、他のものはもはや問題でない、無比絶対のものだ」

ということになる。天国は無比絶対なものです。そうすると、

「今度は、本当に相対界を活かすことになるぞ。相対界を活かして、そこをまた天国にするぞ」

というんです、もう一ついえば。そこまで仰っていないけれども。

「周りを天国にしてしまう。お前の歩いている周りは天国になるぞ。在りて在らしむるものとなつていくぞ」

ということ。もうあなた方は楽しくてしょうがないでしょ、こういう話を聴くと。今まで何かこだわっていたが、もうどこかへいつてしまった。キリストが入ってきたら身体具合も、何か知らないけれども、良くなつてしまった。何かいろんなことを人に思われたら、

「ああ何とも思いやがれ。勝手にしやがれ」

ということなんだ、江戸っ子的な言い方をすると。そういうわけです。

それだから、昨日このところを読んでいて、

「ああ楽しいな、この2節は」

と思つたんだよな。それだけのはなし。何も註解書なんか読みはしません。読んだつて出

て来やしないから。

●天童

福音の世界は非常に簡単、おきなご幼児の如くなる。だから、私はもう、私の号の「天鐘」というのを——やめはしないよ、天鐘と書くけれども——もうこの金偏なんかいらぬ。

「我に金銀なし」

という。これから「天童」と書くかと思う。「天鐘」の「鐘」はいわゆるお金ではないけれども。「天童」となって、

「幼児の如くにならなければ天国に入れない」

というから、幼児になって天国に入ろうと思う。私の号は「天童」としよう。

誰でも、あなた方はみんな天童なんですよ。童心をもたなかつたらダメです。本当に天国に入れない。だから、幼児を見ると、ああ素晴らしいなと、逆に教わるわけだ。幼稚園や小学校の始めくらいの子どもに。

小学校もだんだん悪くなるね。小学校は本当は大事なんだ。幼稚園と小学校の先生は一番大事なんだ。教育はもうこの時期に誤つたらダメだ。

ドイツの或る小学校の校長さんは、生徒を神さまから預かつたものとして扱つたそうだが、さすがは、その校長さんは偉い。それで非常に尊敬された。ドイツでは、小学校の先生はやはりかなり選んで採用する。

「ひるがえ翻りて、おきなご幼児のごとくならずば」

と、キリストは「翻りて」と仰つた。

「お前たちの心をひつくり返せ。幼児にならなければ天国に入ることにはできないぞ」

と。もう利害打算ばかり考えているからね。世の中はだんだんおかしくなつて、いろいろな妙な現象が起きて、大変なことだ。原子爆弾ではなくて、人間の心が結局、世界を滅ぼしていく。その国を滅ぼしていく。歴史を見てもそうだな。全部、滅びはその心の問題からやつてきている。キリストやお釈迦さんが出てきたわけですよ。

●無者となれ

それで、聖書にもどると、

44 天国は畑に隠れたる宝のごとし。人、見出さば之を隠しおきて、喜びゆき、

有てる物をことごとく売りて其の畑を買うなり。

この譬話の大事なところは、

「有てる物をことごとく売りて」

なんです。もう片一方は、

45 また天国は良き真珠を求むる商人のごとし。46 価たかき真珠、一つを見出さ



ば、往きて有てる物をことごとく売りて、之を買うなり。

と。「往きて有てる物をことごとく売りて」と、どつちにも書いてあるでしょ。もう一つ極言すると「己を棄てて」ということです。

「己を棄ててかかれ」

と。マルコ伝10章のあの金持ちの青年の話もそうだね。

「いごとく売りて、我に従え」

と言ったら、その富める青年はこそこそと逃げて行ってしまった。ということは、物において己を惜しんでいるからです。物において己を惜しんでいるから、最後の言葉は

「己を棄てて」

ということなんです。物において、知識において、その人のいろんなことにおいて、自分が誇りとしているものを棄てなければダメだ。

「無者となれ」

ということだよ、簡単に言うと。これが、無者となれない。だから、そこが十字架なんです。

「私の十字架を見ろ。そうしたらお前はことごとく棄てることができるぞ。己も棄てられてあるじゃないか。ここに気がつけ。十字架にお前さんは棄てられてあるよ」という。

「先生、なかなか己を棄てられません」

なんて言う。その通りだ、誰だつて棄てられないよ。

「無者となれません」

と言う。なれないよ。無者は、私は賜ったんだから、十字架で。無き世界を賜ったら、そうしたら、聖霊が円現してきたんだ。だから、

「十字架・聖霊」

というのは絶対的真理です。何と言われようと、こればかりはしょうがない。私はもう——確信でも何でもない——こういうように成ってしまった。そして、聖霊の円というのも無限大を表す。天国はグーッと広がっていく。

そういうことで、我々は聖霊の、使徒たちと同じ次元の世界へ限りなく入っていきましよう。「これでいい」なんていう世界はありませんから。キリストという霊波の中に入っていく。霊の波だ。

これが宝と真珠。

「キリストはわが宝にして、わが真珠なり。わがダイヤモンドなり」ということです。

